

## 宮本憲一先生と齋藤幸平さんの対談

12月11日午後、京都で宮本背広ゼミ主催『未来への航跡 環境と自治の政治経済学を求めて』出版記念企画が開催された。本書は宮本憲一先生卒寿を記念したもので、70年に及ぶ先生の全業績が「著作目録」として136ページにわたり網羅されている。



初めに神戸新聞文化部長兼論説委員の加藤正文さんが開催趣旨を説明。続いて編集委員の栗本裕見さんが、出版経過を紹介。対談は宮本先生による1時間余りの問題提起から始まった。ポイントだけ紹介する。



いま世界は気候危機やコロナ・パンデミックに直面している。これまでは戦争と恐慌で体制転換が問題となったが、今回は地球環境問題から資本主義が問われている。新自由主義からの脱却だけでなく、ESGやSDGsなど「公益資本主義」が注目されているが、株式会社という組織で資本主義の転換ができるのか。

研究を振り返ると、思想史研究から現状分析に移ったのは、四日市公害の衝撃・怒りであり、経済学に対する根本的な疑問からである。学際的調査・研究により公害を告発、社会資本を理論化し、社会資本充実政策を批判して『社会資本論』を刊行した。本書は幅広い分野の多くの人に読まれた。のちに宇沢弘文さんも評価してくれた。都市問題が深刻化するなか、職場外の貧困に注目して、「現代的貧困」として問題を提起した。

対談の聞き手は加藤さんと、ジャーナリストで大著『資本主義と闘った男』の著者、佐々木実さんが担当した。佐々木さんが「素材から体制へ」という宮本先生の方法論を確認したあと、齋藤さんが次のように述べた。マルクスの「草稿」研究から現代的な課題に迫った。素材を重視する方法論から宮本先生に親近感をもってきた。宇沢先生の体制変革の違いを問うと、宮本先生は大きな骨組みとしては資本主義に代わる体制を展望し、政策論として多様な理論を取り入れてきた。ソ連や中国の失敗の経験を踏まえて、「新しい社会主義」に向けて試行錯誤していくことが大切だと指摘した。



齋藤さんは逼迫する気候危機への対応について、コロナ禍は大きな転換が短期に可能なことを示した。資本主義のままでいいのか、どのように変革に向け行動するかを問う。宮本先生はこれまでの公害反対運動、日本環境会議の歴史を振り返り、分権型で横につなぐ総合的な運動こそ求められる。そして若き気鋭の研究者、齋藤さんに向けて多くのエールを送った。大阪市大で開講した「公害問題論」の経験から、大学での取り組みに期待したい。現場から学び、研究者として市民運動に関わることを強調した。

立命館大の森裕之さん、日本環境会議理事長の寺西俊一さんのコメントも心に響いた。3時間半余りにおよぶ対談から、じつに多くのことを学んだ。対談の続きを期待したい。

(2021年12月13日)